

ルターとの対話

～ルター研40周年(2025年)にむけて

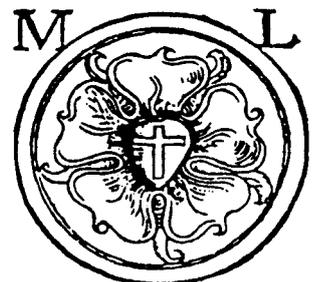


ベツレヘムにあるルーテル教会の、クリスマスに飾られた幼子イエス
=2023年12月8日午前11時50分、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区、
藤原伸雄撮影(朝日新聞デジタルより)

新聞 ルター

Die Luther Zeitungs

ルーテル学院大学(日本ルーテル神学校) ルター研究所二ニュース・Nr.82



あまり明るいことがない。コロナ、ウクライナ、ガザ、災害、自然環境の危機、そして生成AIへの不安……。

さて、ルター研究所は来年(二〇二五年)、四〇周年を迎える。その課題は何か。研究所の目的は「ルターを学ぶ」ことである。しかし学ぶとは、今日の世界の中で、どういうことか。五〇〇年昔の人ルターから一方的に教えられることではない(もちろん教えられることも多いのだが)。そうではなく、ルターに対して、我々が今日的視点をもって問いかけるのだ。ルターが苦しみ、そしてキリストに希望(生きる力)を見出したその源は何か。それをルターに問い、彼と共に考えたいのだ。「ルターとの対話」である。

そのために、ルターに耳を傾ける(歴史的研究)、そしてそのルターに改めて問いかける(今日的な研究)。ルター研究の歴史性と現代性と言ってもよい。これがルターとの対話を行うということである。四〇周年をこのような心構えで迎えたい。(え)

今号の内容

- 2面 研究所40周年の課題
- 3面 ガザを想う
- 4面 シリーズ「人間ルター」②
～父と衝突した人～
ルターのことば
- 5面 ルターの同時代人ラス・カサス
クリスマス講演会報告
- 6面 新たな改革期にあるキリスト教
- 7面 LWF総会に参加して
LWFとは
- 8面 ルターとバッハとわたし
研究所二ニュース

ルター研究所40周年（二〇二五年）の課題

「ルターに聞く」から「ルターに問う」へ

立山 忠浩

ルター研究所が一九八五年に発足する前に、元所長の徳善義和先生や石居正己先生を中心にした翻訳作業が行われて来た。第一集と第二集の刊行は『創世記講義』を残すのみとなった。予定された翻訳作業の完成に終わることなく、膨大なルターの著作の翻訳作業は今後も期待されることであろう。但し、日本語に、そして紙に印刷をするというこれまでの作業は、翻訳ソフトやデジタル技術の進化で不要となる可能性は十分にある。

欧米だけでなく、むしろ教会の伸展が目覚ましい南アジアの神学的な情報を確実に、定期的に入手し、日本の教会に発信することも期待されている。神学という狭い領域に留まらない他宗教、他分野の思想や研究からの情報に触れ、さらに他分野に発信してゆけるだけの研究所の力を蓄えることも重要である。但し、限られた研究所の人材で、誰がそれを担うのかという現実的な問題があるので、単なる夢としてここでは閉じておこう。

自分自身の身の程をわきまえて今後の課題と期待を考えて見よう。我々にとつ

てルターとは、聖書解釈において、教理やあらゆる神学的な理解においてもその基準であった。ルターの言動や思想が尺度となって来たと言っても過言ではない。つまり、あらゆることを測り、批判する際の根拠とも言えた。しかし、五〇〇年前の時代に、ドイツという狭い地域において展開したルターの言動は、今日、日本だけでなく、さらに他宗教や諸思想に対するグローバルな視座が求められる時代に対応できないが生じているように思う。

もっと足下のことに狭めるならば、あのヴァルトブルク城で、わずか十週間で成し遂げた新約聖書の訳語であっても、またローマ書やガラテヤ書の講解にしても、あるいは『小教理問答』という信条に係わる書も、再検討しなければならぬことが散見されるように思える。「ルターに聞く」ではなく「ルターに問う」、これが鍵となる。

(所員 JELC 都南教会牧師)

「ルターと対話して、私たちの文脈で神学する」

高村 敏浩

一九八五年一〇月にルーテル学院大学（当時はルーテル神学大学）の付属研究所としてルター研究所、通称「ルター研」ができてから、来年で四〇年となります。昨年、初代所長の徳善義和先生と二代目所長の鈴木浩先生が帰天されたことや、所員の中心が大学専任教員から、教会を牧する教職者になっていくこともあり、四〇周年はある意味、研究所にとって節目のときであるように感じます。そのため私たちは、研究所の四〇年、また、それに先行する日本におけるルター研究の歩みを振り返り、これから、特にルーテル教会に資する研究所のあり方について考え、ビジョンを描く必要があるのではないかと受け止めています。

日本福音ルーテル教会では、今年久しぶりに教職受按者がありました。ルーテル教会では、牧師受按はルーテル教会という限定されたものではなく、教会、つまり、キリスト教会へのものだと言われたりします。教職受按手式の式文を見ると、確かにそのようになっていきます。それはつまるところ、牧師となります。

者は、一六世紀にはじまったルーテル教会の伝統だけでなく、全キリスト教会の伝統に連なるのだということです。教会の伝統とは、具体的には、聖書解釈の伝承であり、歴史です。事実、「聖書のみによつて」と言うとき、ルターは決して「私と聖書だけ」とは主張しておらず、むしろ先行する解釈や、同時代人たちの理解との対話の必要性を強調したわけです。私たちも同じです。ルターはもとより、教父たちや、中世や近現代の牧師や神学者と、そして一三〇年を超える日本福音ルーテル教会や、また日本ルーテル教団、更に四〇年を迎えるルター研に携わってきた牧師や神学者といった信仰の先人とその残した研究や説教を通して対話し、みことばと格闘し、神学しなければならぬのです。

ルター研四〇周年の節目を、今年、来年、さらにその翌年二〇二六年という、前後一年を含む三カ年で捉え、実りあるものとして過ごしたく思います。

(所員 JELC 三鷹教会牧師)

ガザを想う ―ルターと共に

ガザで今、進行していることはひどい。二〇二三年十月、ハマスの奇襲とそれに対するイスラエルのガザ地区への報復攻撃。蛮行である。イスラエルのやっていることは、ジェノサイド（集団虐殺）そのものだと思う。

ここでは、この戦争全体については論じない（ただ一言すれば、戦争をやめろ！ 誰が何と言おうと、絶対平和主義）。さて、一枚の写真をみた（一面参照）。幼子が布にくるまって寝かされている。クリスマスの季節。当然、一つの聖句がうかぶ。

あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。
これがあなたがたへのしるしである（ルカ二・十二、新共同訳）。

ベツレヘムの馬小屋。貧しいとはいえ、やさしい父ヨセフと母マリア。羊飼いや博士たち。一言で言えば、平和。しかし、この一枚の写真はそうではない。もちろん幼子イエスがモデルである。しかし周りは瓦礫だ。瓦礫の中の幼子イエス。いや、そうではない。瓦礫の中の、ただの惨めな一人の幼子である。
ここで私はルターのクリスマス説教の、ある一節を思い起こす。ルターはベツレヘムの馬小屋の光景を説明して、そしてこう言うのである。

皆さんの中には、心ひそかにこう考える人がいるでしょう。「ああ、私がおの場に居合わせたらなあ！ 喜んで御用をつとめただろう！ 洗たくもしただろう、お守もしただろう。そして羊飼いと一緒に、大喜びで飼葉桶の中のイエス様にお目にかかっただろうに」。だが、あなたがたが今そう思うのは、キリストがどんなに偉大な方であるかを知っているからです。しかし、もしもその時その場にいれば、あなた方にしたところで、ベツレヘムの無関心だった人々と五十歩百歩だったにちがひありません。なんと愚かなことを考えるのですか？ それなら、なぜ今すぐそうしないのですか。キリストはあなたの隣人のうちにいましたもうのです。苦しみの中にある隣人にすることは、主御自身にすることなのです」（ルター『クリスマス・ブック』）。

私たちは、幼子がイエス様とわかっているから、目を細めて奉仕する。しかし瓦礫の中の名も知らぬ幼子なら、遠い国のかわいそうな子どもで終わりそうだ。
だが、この時、イエスの痛烈な御言葉が心をよぎる。

そこで、王は右側にいる人たちに言う。「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」。すると、正しい人たちが王に答える。「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか」。そこで、王は答える。「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」。

それから、王は左側にいる人たちにも言う。「呪われた子ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いていたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ」。すると、彼らも答える。「主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか」。そこで、王は答える。「はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである」。こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである」（マタイ二五・三四～四六）。

「最も小さい者」になすべきことがある。30年後にその人がキリストになる人だから、私たちはその小さな幼子に目をとめるのではない。そうであってはいけない。イエスだろうと、そうでなかろうと、弱り果てている幼子に目をとめるのだ。奉仕とは、そういうことではなかろうか。相手がイエス様、クリスチャン、教会だから奉仕するのではない。そうではない。どこのだれかは問わず、困っている人だから奉仕（ケア）するのだ。それが、ほんとうの神への奉仕（神奉仕=礼拝）である。

江口再起（所長）

シリーズ
「人間ルター」20父と衝突した
ルター

高井 保雄



中川浩之・画

精神分析の理論などでは、人は、精神的「父殺し」のイニシエーションを経て成人するとされているようだ。

では、父との間に大きな衝突があったルターの場合はどうなのだろう。

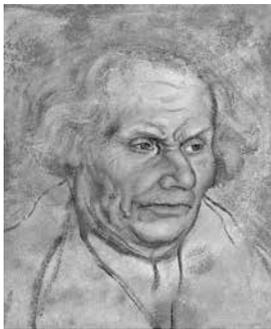
ルターの父親は、農民だったが、当時新興の鉱業に赴き、一鉱夫から刻苦勉励し、遂に溶鉱炉を複数持つまでに成功した。彼は長男マルチンに幼少期からラテン語教育を施し、当時まだ数少ない大学で学ばせた。息子が将来出世して家名を上げ、一族が繁栄することを夢見ていたのだ。ところがマルチンは、「死を覚えよ」という中世の格言そのまま、死を恐れ、しばしば深い憂愁に沈む青年だった。ある時落雷に遭遇し、思わず守護聖人に「助かったら修道院に行く」と祈り、助かったので直ちに大学を去り、修道院に入った。

後にそのことを知った父親は激怒した。修道士とは、生涯独身で、財産を持たず、神にのみ仕える存在なのだ。修道誓願の時、長年の夢があっけなく潰えた父は息子を「お前は『汝の父母を敬え』という戒めを知らないのか!」と痛罵した。父

の言葉は息子の心に深く突き刺さった。

修道生活の中で、マルチンは「如何にして恵みの神を獲得するか」に没入した。が、思わぬ事に「天国の扉」は所謂「良き業」の遂行ではなく、「神の恵みのみ」を信ずる信仰により開かれると知った。もはや彼自身、修道院に留まる事は無意味となった。彼は、牧師として結婚し、一家を成した。ここに、父親との長年の確執は解消する事となった。だがこの事件は、「教会の父」たる教皇との間で遥かに巨大な衝突を生じた。この争いが五百年間の軋轢を経た今日では、かつての「反抗者」ルターは「信仰の父」(ペーター・マンズ)とも呼ばれる時代となっている。

(所員 JELC 引退牧師)



父 ハンス・ルター

ルターの
ことば

NRK 竹の塚教会 牧師 江本 真理

上記のことばは、宗教改革の発端になったとされるいわゆる「95か条の提題」の一番最初に掲げられている条文です。この原稿を書いている今、レント(四旬節)の期節を過ごしていますが、このレントの日々に特に思い起こすルターのことばです。今年の四旬節第1主日には、マルコ福音書から『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』(マルコ 1:15)との主イエスによる福音宣教の言葉を聞きました。マルコは、主イエスの福音宣教の言葉として「悔い改めること」(マタイ 4:17)だけでなく、「福音を信じること」を伝えています。「悔い改めて福音を信じなさい」と。

この「福音を信じなさい」という部分を改めて原文のギリシア語で見ると、「福音(エウアンゲリオン)」という言葉の前に「エン(英語では in)」という前置詞が入っていることがわかります。つまり「福音の中で信

私たちの主であり師であるイエス・キリストが、「悔い改めなさい……」と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである。

『贖宥の効力を明らかにするための討論』(1517)

じなさい」とも訳せるのです。「福音を信じなさい」と訳せば、「福音」は信じる対象ということになりますが、「福音の中で信じなさい」と取れば、「福音」は信じる場所/空間ということになります。これは、このみことばを聞く私たちの受け止めを大きく転換させることになると思います。

私たちは、悔い改めなければならない、福音を信じなければならないと言われているよりも、主イエスが宣べ伝えた神の「福音の中で」信じることへと招かれている。神の恵みの「福音の中で」、悔い改めて信じることへと招かれている。ルターが言う「信じる者の全生涯が悔い改めである」ということも、そのような神の福音の恵みの中で絶えず悔い改めて(立ち帰らされて)、神の福音に生かされて生きる者の喜びの生涯を言い表しているとも言えるのではないのでしょうか。

私の研究

ルターの同時代人

ラス・カサス

アンドリュウ・ウィルソン

最近、バルトロメ・デ・ラス・カサス（一四八四〜一五六六）の最古の書簡の翻訳（英訳）を、カトリック大学出版局に提出しました。ラス・カサスの父はセビリヤ出身のスペイン人で、アメリカ発見のクリストファー・コロンブスの同僚でした。ラス・カサスは一五〇二年にイスパニョーラ島に定住し、一五〇六年に司祭に叙階されます。インディオに対する今までのひどい扱いについて告解を申し出ますが拒絶され、良心の危機に陥りました。しかし彼は一五一四年にインディオの奴隷を解放し、残りの人生をアメリカ先住民の保護に捧げました。



ラス・カサス

私の翻訳した書簡は、ラス・カサスの初期（一五二五〜一五三一年）のもので、彼はスペイン王カルロス五世の治世移行期に宮廷で活動し、平和的な植民地を計画しました。一五二二年にドミニコ会に入会し、神の掟を無視しインディオを奴隷にする者を批判する厳しい預言者

として頭角を現し、真理と聖なる生活によって、平和的で柔和な伝道活動を推進しました。ラス・カサスはルターと同時代人です。彼らの人生は、カルロス五世やカイエタン枢機卿、エラスムスに至るまで、多くの人物や出来事を共有しています。一方は新スコラ主義、もう一方はより神秘的な人文主義から出発し、それぞれの神学を展開しました。今日、ルターが最初の近代人と評されるように、ラス・カサスもまた、人権の始祖として評されたりします。しかし、こういった理解はやや安直でステレオタイプです。なぜなら、歴史というものはまるで外国のようなもので、過去を真に理解するためには、改めてその「外国語」を学ぶ必要があるのです。

ルターの改革は画期的なものでしたが、それは当時の世界、つまりキリスト教界全体の刷新と再編成の中で行われたのです。ルターの活動したドイツと地球のほぼ裏側で行われたラス・カサスの生涯と仕事を研究することは、ルターの仕事の世界的な広がりの枠組みをよりよく理解するのに役立つことでしょう。

（研究員 E L C A 宣教師、ルーテル学院教員）

ラス・カサスの著作の日本語訳として、『インディアスの破壊をめぐる賠償義務論』（岩波文庫）、『インディアス史』（岩波文庫）、『裁かれるコロンプス』（岩波書店）などがあります。

クリスマス講演会報告

昨年十二月一日（日）の午後、クリスマス講演会が開催されました。全国オンラインでの講演会は第三回目になります。今回のテーマは、「ルターとクリスマス」。プログラムは三部構成でおこなわれました。

第一部はシンポジウム「ルターとクリスマス」。ルターはクリスマスのための多くの説教をしています。その一部がアメリカのルター研究者 R・ベイントンによって編集され「クリスマス・ブック」という本になって出版されています。この本の説教に基づいて、ルターのクリスマス理解をめぐって、三人の先生によって討論がすすめられました。立山忠浩先生は、ルターのクリスマス理解が十字架の出来事と深く結びついていること、宮本新先生は、馬小屋に登場する羊飼いたちと全信使祭司性との関連をめぐって、そして高村敏浩先生は、説教者としてのルターに焦点をあてて語っていただきました。

第二部は高井保雄先生によるお話「楽しいルター家のクリスマス」でした。クリスマス之夜、子どもたちと一緒に祝いするルター家の様子を、大人も子どもも楽しくわかるように話していただきました。

第三部は湯口依子さんによるパイプオルガンの演奏でした。ルーテル学院大学チャペルから全国の皆さんにクリスマスにちなむルターやバッハの美しい調べをお届けしました。多くのの方々

がオンラインに参加して下さりありがとうございました。またご奉仕下さった先生方に感謝します。



クリスマス講演会（2023年）のポスター

新たな改革期にあるキリスト教 〜エキュメニズム、その先へ

宮本 新

「キリスト教は新たな改革期の戸口に立っている」。

そのように話すのはカトリック教会の司祭トマーシユ・ハリク氏。昨年九月、ポーランドのクラクフで開催されたルーテル世界連盟の第一三回総会基調講演のことだった。世界九十九か国から集まった一五〇教会の正議員はじめ一二〇〇名のルーセランたちがその聞き手になる。講演を要約すれば、「エキュメニズム、その先へ」であり、キリスト教の将来的展望を述べ、相手の足元に灯りを点そうとするような講演であった。信仰には、人のこころ、その精神世界の事柄もあれば、その人が生存する足元が揺らぎ、そこで人類的な課題に向き合う営みもある。今回は気候変動にゆらぐ世



基調講演をするトマーシユ・ハリク司祭

界のことであり、「正義と恵みの業」を祈り求める生活世界、またウイルスや微生物など小さき者たちが支える世界のこともである。神の被造世界とはそのような世界のことである。

ハリク司祭はプラハにあるカレル大学社会学部教授。大学生の時にチェコの民主化運動、「プラハの春」（一九六八年）を経験している。しかしその卒業スピーチは「破壊的」とみなされ、当時の共産党政権から教育関係ならびに学術的地位に就くことを禁じられた。その「暗い時代」に本格的に学んだのが神学であった。まもなくして東ドイツで叙階、一〇年余りを地下教会で活動することになった。

転機は一九八九年の無血のビロード革命であった。新生チェコスロヴァキアにおいて大統領顧問の一人となった。また教皇ヨハネ・パウロ二世からは教皇庁評議会の顧問に任命されている。主な務めはカトリック教徒ではない人たちとの対話の推進だ。こうした足跡から人種差別や宗教的不寛容、また民主化や世俗化のプロセスにあるさまざまな社会課題について広く発言するようになった。

こうした時代はさながら出エジプト記の「エクソダス（脱出）」のようであ

り、また「罪が増すところに、恵みはなおいつそう満ちあふれた」（ロマ書五・二〇）出来事を味わい知る年月でもあったという。その核心には、十字架と復活の体験的省察があり、それが「キリスト教の将来」を探るサーチライトの役割を果たしている。コロナ禍において閉ざされた会堂は、イエスの空の墓を思い起こす体験となる。長期間にわたる社会的トラウマにおいて「闇の中に輝く光」は探求の言葉となり、世俗化を生きる宣教はエマオの途上の見知らぬイエスとの出会いが希望となる。

こうしたハリク司祭の講演は、LWF総会の側からいえば、隣人からの呼びかけに相当する。司祭はつづける。今、キリスト教は二六世紀にあつた宗教改革と同様、新たな改革期の戸口にある。二〇世紀の第二ヴァチカン公会議とペンテコステ運動がそのしるしである。この指摘は宣教論において重要なことをいっている。歴史的にいえば、一九二〇年の世界宣

教会議がエキュメニズム運動の起点として知られている。その後、カール・バルトとハルテンシュタインのラインで、ミッシオデイの神学が二〇世紀後半の宣教論の骨格を形成したが、その次にある変数を挙げているからだ。もう少しいえば、リベラルなキリスト教から弁証法神学、さらにその先へ、ということになるだろうか。冒頭の言葉は、この神学的なアンテナと熟慮に裏打ちされたものである。

司祭の講演は徹底したイエス・キリス

トへの注力がある特色である。しかも終末論的なキリスト論である。ただし、「キリスト教や教会が衰退するかどうか」というような問いではない。むしろ「どんなキリスト教がどんな風に終わろうとしているのか」を考えている。机上の未来予測ではない。「終わりからはじまる」神のみ業を熟慮している。「地に落ちた一粒の種」にこめられた再生と誕生の期待であり、神信仰にむすばれている。一六世紀のあの宗教改革の信仰であり、あの空の墓に立ち尽くす人々の記憶に抱かれている。終末的であると同時に、受肉の……。その内実は、十字架に架けられたあの方への徹底した信頼の表明であり、「共に歩もう」というエキュメニカルな招きになっている。

（所員 ルーテル学院・神学校教員）



2016年カトリック・ルーテル共同の祈り
(教皇フランシスコとLWF議長ユナン牧師)

LWF総会に参加して

三浦 慎里子

昨年九月にポーランドのクラクフで開催されたルーテル世界連盟の総会に、ビジターとして参加する機会をいただきました。九月末には卒業論文の提出締切を控えていましたので、大切な時期に渡航してもよいものかと悩みましたが、貴重な学びのチャンスであると考え、参加を希望しました。

クラクフへと向かう途中のドバイ空港で乗り継ぎ便を待つ間、事前に送付された総会資料に目を通していると、隣に座っていた男性が資料を覗き込み、何やら親しげに話しかけてきました。少し警戒しながらも話を聞いてみると、その方は同じ会議に参加するナミビアのビショップだということが分かりました。自己紹介をして、互いの国や教会のことを語り合いました。初めてのヨーロッパへのひとり旅で少々心細い思いをしていましたが、思いがけず旅の仲間を与えられ、私にとつて忘れられない旅の始まりとなりました。

会場となったコンベンションセンターのロビーは、各国の教会の活動を紹介するブースが設けられ、イベントなどで連日活気に溢れていました。気候変動やジェンダーなど、世界的に高い関心が寄せられているトピックについても、クリスチャンとして、また教会としてどのように関わっていくことができるか、活発なディスカッションが行われており、皆さんの報告を聞いて、私自身も刺激を受け、考えを深

めることができました。会議の見学はよい学びとなりましたが、総会に参加している様々な役職や立場の方々と言葉を交わし知り合えたことの方が、より鮮明に印象に残っています。女性たちの支援について目を輝かせながら話してくれた、ケニアの牧師の妻である女性、宿泊施設でルームメイトになったドイツ留学中の女性牧師、アウシュヴィッツのツアーで仲良くなったインドネシアの教会の女性たち、小さな子供を育てながらアメリカの神学校で勉強している男性神学生など、たくさんの出会いがありました。私たちは、母国ではそれぞれの国や地域における特有の課題に向き合っています。そのような人々がこの機会に集まり、世界中のルーテル教会で神様と人々に仕えるために働く同労者たちと情報を共有し、語り合うことを通して、励まされて再びそれぞれの働き場へと戻っていくのです。

クラクフ滞在中に体調を崩して寝込んでしまったり、自分の英語力の無さに落ち込んだりして、不甲斐ない思いもたくさんしましたが、世界の教会の一員でもある日本福音ルーテル教会という視点が確かに与えられたことが、一番の収穫であったと思います。貴重な機会を与えてくださった日本福音ルーテル教会と神学校、そして、現地で支えてくださった全ての方に感謝いたします。

(JELC みのり教会・岡崎教会牧師／執筆時は神学生)

ルーテル世界連盟 (LWF) について

一九四七年に設立されたルーテル諸教会からなる連盟組織。本部はジュネーブ。現在九十九か国一五〇教会(信徒数約七五〇万人)の加盟教会。国内では日本福音ルーテル教会と近畿福音ルーテル教会が加盟、日本ルーテル教会は準加盟である。ルーテル教会の神学的な研究と、世界各地にある教会間の交流と対話の役割も果たす。

前史は第一次大戦、ロシア革命などのヨーロッパ全域の動乱にさかのぼる。とりわけ東欧に広がるルーランたちのヨーロッパ内難民の人道支援・相互扶助は国籍国境を越えた支援モデルとなる。現在二八か国で八〇〇〇人近くの機関職員が働く人道支援部門(ワールドサービス)はこのような当事者としての難民問題がルーツにある。パレスチナ・ガザ地区では七〇年にわたりパレスチナの人々にむけた医療活動としてアウグスターナ・ヴィクトリア病院が運営されている。

近年では宗教改革五〇〇年(二〇一七年)において連盟議長ムニブ・ユナン牧師と教皇フランシスコが連盟設立の地ルンドで共同の祈りをささげることが記憶されている。このようなポスト宗教改革の動向は、連盟とローマ・カトリック教会との半世紀にわたる対話が背景にある。その国際委員会のメンバーであった徳善義和先生と鈴木浩先生のお働きをあらためて思う。このような対話促進は、さらにユダヤ教やイスラム教、仏教といった諸宗教との対話と相互理解にまで広がりが、重要な文書が残されている。

(宮本新)



J・S・バッハ

シリーズ

「ルターとバッハとわたし」



M・ルター

切り絵：小嶋三義

秋吉 亮

元々ベートーベンが好きだったのですが、聖歌隊の指導に携わるようになり、触れる音楽が一挙に拡がりました。

例えば復活日のグレゴリオ聖歌である *Victimae paschali laudes*。教会旋法なので短調でも長調でもないため、現代人には少々歌いにくいのですが、さらに拍子も無く、少人数の歌い手がお互いに息を合わせていかなければならない曲でしょう。そのメロディーを元にした教会讃美歌一〇三番「キリストはよみがえりぬ」も同じで、会衆讃美には取り上げにくい曲だと思います。

言ってもメロディー以外のパートでは、#やリが突然現れ、移動ドで教育を受けてきた私には、私は今何調を歌ってるの？と困惑させられますが。さて、明確な拍子を持つバッハの曲からは、拍子自体にもバッハの思いを感じます。例えばミサ曲短調のニケア信条の真ん中あたり、*Et incarnatus est*「肉体を受けて人となり」が三拍子（さらに前奏と間奏は三小節）で、そこから *cris regni non erit finis*「その支配は終わること無し」まで三拍子が続きます。このような信仰告白の中核部分での三拍子が、バッハ自身の信仰告白のようにも感じられるのです。

これがルターの時代になると、教会讃美歌九七番「主死にたまえり」は、変拍子のようにあります。拍子があるので、奏楽のサポートがあれば会衆も讃美に加わることができます。さらにバッハの手にかかる

と、讃美歌Ⅱ編（日本基督教団出版局）一〇〇番「主は死にながれ」は、明確な四拍子なので、フェルマータさえ合わせられれば会衆がメロディーを容易に歌うことができます。とは

さらにバッハの手にかかる

と、讃美歌Ⅱ編（日本基督教団出版局）一〇〇番「主は死にながれ」は、明確な四拍子なので、フェルマータさえ合わせられれば会衆がメロディーを容易に歌うことができます。とは

（JELC東教区聖歌隊指揮者 日吉教会員）

研究所ニュース

●ルター研四〇周年の準備

ルター研究所は、ルーテル学院大学・神学校の付属研究所として、一九八五年十月に発足しました。徳善義和先生（初代所長）、石居正巳先生、三浦謙先生、そして私（江口再起）の四名で出発しました。その後、鈴木浩先生が二代目所長となられました。その間、『ルターと宗教改革事典』や『ルター著作選集』の出版など堅実な研究をすすめてきました。

さて、いよいよ来年（二〇二五年）、四〇周年を迎えることとなり、今年から三カ年計画で準備に入ります（準備の年、四〇周年の年、まとめの年）。その基本的な方針は、一、二面をご覧ください。一言でいえば、ルター研究における歴史的な性格（翻訳等を含む原典研究など）と現代的な性格（今日的視点からの問いかけ）です。

具体的には、幾つかのことを考えています。一つは、日本の蓄積されてきた数々のルター研究の振り返りです。特に、ルーテル教会のルター研究者の仕事に、改めて学ぶ作業です。更に、ルーテル教会の最重要文書「アウグスブルク信仰告白」五百年（二〇三〇年）への、今日的視点に立った研究などです。

もちろん『ルター研究』の記念号や記

念講演会なども計画に入れています。どうぞ、お覚えください。

●所員会（研究会）

ルター研究所の所員は、次の方々です。江口再起（所長）、高村敏浩（助手担当）、高井保雄、立山忠浩、石居基夫、宮本新。また所員会にはアンドリュウ・ウイルソン、多田哲の諸先生も参加していただいています。所員会は毎月一回、オンラインで開かれ、前半は研究所のプログラム企画・準備、後半は所員の研究発表や討論をしています。

●献金の感謝とお願い

ルター研究所への、皆様のご支援と献金、心から感謝します。

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（一〇〇万円）と皆様のご支援（約一五〇万円）で成り立っています。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研究所）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さまのご理解とご支援をよろしくお願い致します。

（所長 江口再起）

ルーテル学院・ルター研究所
三鷹市大沢三ー一〇一
電話 〇四二一三ー一四六一
発行責任：江口 再起（所長）
e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp